

2009年2月下旬 渋谷ユーロスペースにて春節ロードショー!!

ほか大阪、京都、神戸につづき全国順次公開

長江にいきる ^{ビンアイ} 秉愛の物語

中国/2008/中国語/カラー/DVカム/117分/ 原題:「秉愛」 監督:フォン・イエン(馮艷)



配給・宣伝：ドキュメンタリー・ドリームセンター（DDセンター）

東京都新宿区河田町 7-6 ID 河田町ビル 3F シネマトリックス内

Tel 03-5362-0671 / Fax 03-5362-0670 / E-mail: doc.dream.center@gmail.com

配給協力：コミュニティシネマ支援センター

東京都港区赤坂 1-9-15 日本自転車会館 2号館 9階

Tel 03-5562-9574 / Fax 03-5562-4423 / <http://www.jc3.jp>

宣伝：スリーピン（担当：原田）

東京都杉並区阿佐ヶ谷 4-21-16-4F 携帯: 090-7903-8534

Tel 03-5327-3771 / Fax 03-5327-3772 / E-mail: haradaru@gmail.com

公式サイト→www.bingai.net

※ タイトルの「秉」の字はワープロソフトによっては「へい」あるいは「ひょう」で変換されます。あるいは「のぎへん」＋3画（総画8画）です。

Unicode 16進：79C9, 10進：31177, JIS16進：633D, Shift JIS 16進：E25C。

【シノプシス】

長江のほとりで家族とつつましく暮らすお母さん、^{ビンアイ}秉愛。

働き者の彼女にとって、育ち盛りの子どもたちを育て病弱な夫と連れ添うことは、^{とうとう}滔々と流れる川のように十分な幸福だった。政府から降って来た移住命令によって、今の土地から離れなくてはならないなんて、なぜ？ 平穏な生活が営まれるなか、小役人がときどき嵐のようにやってきては、甘い言葉や脅迫で一家を追い出しノルマを達成しようとする。学もコネもない秉愛は、理不尽には頑固でしか対抗できない。次第に一家は追い詰められていく……。

【みどころ】

☆ つぶされようと、人生には勝つ

若い頃 父親に言われて恋人と別れ、長江岸辺の一家にイヤイヤ嫁いだ秉愛。しかし長男 ^{チャンウエン}昌文 と長女 ^{リンジ}靈芝 を授かり、体が弱く頼りない夫 ^{ジョン・ユンジェン}熊雲建 との間にも愛情をめぐむようになっていた。本作撮影の7年間で、子どもたちは成長し、秉愛の髪には白髪が見えても、顔には母親としての豊潤な落ち着きと自信が生まれていく。毎日の草取りと畑仕事、布靴を手で繕い儉約する日々。収穫の喜びや子どもとの会話、夢の話。そして傍らではいつも長江が堂々と流れ、そこには多くの船が行き交うのだった。まるで秉愛を次から次へと襲う試練や喜びのように……。

ダム建設で川の水位が上昇するため、村では秉愛の家を含む海拔 135 メートル以下の家の住人は移住を勧告されていた。しかし秉愛は抵抗する。補償金をもらって街に移り住むのではなく、農地のあるここで暮らし続けたい……。国家の都合で自分の生き方を変えることに断固反対の姿勢を7年以上も貫き通すのだった。

「何としても生き抜く」「わたしは強情なのよ」と笑顔で言う彼女。この映画は、三峡ダムについてではなく、秉愛というひとりの平凡な中国女性の生き様の物語である。「自分が死んだ後、こう言われたい。“あの人は骨身を惜しまず、よく夫や子どもの面倒を見たね”——最高の褒め言葉よ」その大げさな言葉の背後には、中国内部の貧しい農村で尊厳をもって生きることの困難が浪々と湛えられている。

☆ 中国の栄光の陰で

三峡ダムは 2009 年に完成予定。2008 年 6 月 2 日、オリンピックの聖火ランナー 25 人が、2309 メートルという世界最大のダムの上を走った。たった 18 分のリレーだったが、「我々は 100 年かけてこの道のりを作ってきた」と三峡ダムの副所長は言う。1918 年に孫文が構想した巨大ダムの完成が近づき、そして同様に中国の威信を賭けたオリンピックが 2008 年に開催。百年来の中国の夢が二つ、いま叶おうとしている。

一方、300 億ドルの工事費をかけた国家プロジェクト三峡ダムは、140 万人もの住まいと田畑の水没が代償だ。長江岸辺に暮らす農民が世界のメディアに注目されるのは移住前後の一時だが、国の決定は彼らの人生の中でどのような位置を占めるのか。

ジャーナリズムやマスコミが政治経済動向や社会現象としての中国現代社会を大きく捉える中、このドキュメンタリーはひとりの個人の生活に 7 年間寄り添い、その日常の現実を受け止めた。

ひとりっ子政策が貧しい農村の女性の心と体にどのような傷を残しているのか。村の会議と票決はどのように執り行われているのか。『長江に生きる』は、最も貧しいと言われる内陸部の農民の暮らしの現実と個人の生き様を見せてくれる。

☆ ドキュメンタリー版『秋菊の物語』

近年 中国の現実を淡々と映し出す中国映画の現代性が高い評価を得ている。『長江哀歌』、『1978 年、冬。』、『雲南の花嫁』などが好評だ。ドキュメンタリー映画も、瀋陽の巨大国営工場群が没落する姿をデジタル・ビデオで捉えた 9 時間の傑作『鉄西区』や、ベルリン国際映画祭の新人監督賞（ヴォルフガング・シュタウテ賞）を受賞した『水没の前に』など大型作品が山形国際ドキュメンタリー映画祭ほか世界の映画祭を席卷している。

劇的な変貌を遂げる現代の中国社会を映すリアリズム映画の系譜に、主人公から距離をとる観察型の視点が多い中、『長江に生きる』はひとりの平凡な農民女性の逆境との闘いに、一般観客が感情移入し心を寄せられる生き方をストレートに描く。いわゆる「肝っ玉かあさん」。これはかつて、コン・リーが『秋菊の物語』（チャン・イーモウ監督）で演じた農村の女性の奮闘劇のドキュメンタリー版である。

☆ 日本で学び世界へ

「久しぶりに人生という言葉が文学の中に見出し、高揚した。」(高樹のぶ子)

「ここには書きたいという意欲がある。」(池澤夏樹)

「古めかしいともいえそうなリアリズムの作風」「荒削りではあっても、そこには書きたいこと、書かれねばならぬものが充満しているのを感じる。」(黒井千次)

これは2008年芥川賞の選評であるが、実存の切実さへの直球を投げた中国人の楊逸著^{ヤンイー}『時が滲む朝』が、観念性や技巧に縮こまる今の日本文学界に大きな波紋を投げかけていると言える。

京都大学大学院で経済学を学び、博士課程まで終えた中国人のフォン・イェン監督の『長江にいきる』が山形国際ドキュメンタリー映画祭でアジア部門のグランプリ<小川紳介賞>を受賞したことと大きく重なって見える。1960~80年代に三里塚闘争や山形の農民の映画を作ったドキュメンタリーの巨匠、小川紳介の名のついた賞を受賞したことは、フォン・イェンにとって特別の喜びだった。

彼女は1993年に見た小川作品に受けた衝撃から自らドキュメンタリーを撮り始め、また小川紳介著『映画を穫る』を中国語に翻訳・出版までしている。長い留学生活に加え結婚・出産を経験した日本という外部と、小川紳介監督という先輩を得て、彼女はドキュメンタリー映画を通して母国中国を見つめている。

☆ 日本のベテラン音響マンとの出会い

第10回の山形国際ドキュメンタリー映画祭で、フォン・イェン監督は偶然ひとりの日本人と出会った。講師として招かれていた映画音響の菊池信之だった。

菊池氏は1970年代の小川プロダクションで映画人生をスタートし、その後フィクション、ドキュメンタリーを問わず数多くの映画音響を担当してきた。青山真治、河瀬直美、萩生田宏治、諏訪敦彦など日本の若手作家たちの仕事を支える重要な役どころを果たしてきた映画音響スタッフである。

菊池氏は山形映画祭で『長江にいきる』と出会い、フォン・イェンの次回作の音響を担当する約束を交わす。この縁のおかげで、『長江にいきる』は日本で一般公開されるこの機会に、菊池氏による新たなサウンドヴァージョンに衣替えする。

デジタルビデオやHi-8ビデオを使い、ほとんどひとりで撮影・録音して作った『長江にいきる』が、プロの参加を得てどのように生まれ変わるのか。音というもうひとつの物語を得て、長江のほとりの空間的広がり、乗愛の心の内面的広がりがどのように立ち上がるのか。それは日本を含む世界で数多く作られるデジタル・ビデオ映画の未来にとって、重要な指針を秘めている。

☆ 秉愛の物語は続く

1995年に初めて出会った秉愛。最初は「カメラなんて置いて畑仕事を手伝って」と言うばかりで、撮影にはあまり協力してくれなかった彼女と、フォン・イェン監督は十年以上にわたる信頼と友情を築いていった。秉愛という女性に“ほれ込んだ”監督は、『長江にいきる』の完成後も、2008年春まで秉愛一家の撮影を続けてきた。

それはまさに今、編集の終盤を迎えようとしている新作ドキュメンタリーのためである。これは長江のほとりに住む4人の女性の10年史で、秉愛のその後の人生も描かれる。ある村の共産党幹部、華やかな美容師、そして頑固で独立心の強い老婆。年齢も境遇も異なる女性たちが三峡ダムによる移転に直面しどのように生活が変わっていったのか、そしてそのときどきの彼女たちの心の動きが、丁寧な撮影とフォン・イェン監督ならではの静かな眼差しで捉えられていく。この作品は2009年初春に完成予定である。

【監督プロフィール】



フォン・イェン(馮 艶)

1962年天津生まれ。天津の大学で日本文学を学んだ後、日本に留学。1988年から13年間日本に滞在し、京都大学大学院経済学研究科博士課程で農業経済学を研究する。1993年の山形国際ドキュメンタリー映画祭でドキュメンタリー映画作家小川紳介（1935～1992）の語りを収録した『映画を穫る―ドキュメンタリーの至福を求めて』（山根貞男編集・筑摩書房）と出会い、触発されて中国語に翻訳し台湾で出版する。1994年、映像ジャーナリストの集団アジアプレス・インターナショナルに入り、写真とビデオ制作を学び、ドキュメンタリー製作を開始。学校に行けない子どもたちや、三峡ダムで水没する長江沿岸部など中国農村部の人々の暮らしを撮り続ける。

本作の原点とも言える『長江の夢』（1997, 85分）が初長編作品。山形国際ドキュメンタリー映画祭'97 アジア千波万波、第22回台湾国際ドキュメンタリー祭（優秀記録賞）、香港国際映画祭1998などで上映された。現在三峡移民を描く一連の作品群の集大成となる『長江の女たち』（仮題）の編集中。

訳書には他に『ゆきゆきて、神軍』（原一男著）など。上述『映画を穫る』の改訂（簡体字）版が2008年に中国大陸でも出版され、売れ行き好調である。

2002年に帰国し、現在は北京・天津を生活の拠点とする。夫と娘の三人家族。

2005年昆明で開催された雲之南記録映像論壇での土本典昭作品上映の際の通訳や字幕翻訳、2008年北京で開催された「小川プロ回顧展」の通訳・翻訳・企画実施スタッフなど、今では現代日中ドキュメンタリー映画交流の要としても欠かせない人物となっている。

【スタッフ・プロフィール】

菊池信之（きくちのぶゆき）

映画音響。ドキュメンタリー、フィクションを縦横にまたぐ。

代表作：

- 『ニッポン国古屋敷村』（1982、小川紳介監督）
- 『1000年刻みの日時計』（1986年、小川紳介監督）
- 『書かれた顔』（1995、ダニエル・シュミット監督）
- 『百年の絶唱』（1988、井土紀州監督）
- 『ナージャの村』（1997、本橋成一）
- 『TOKYO EYES』（1998、ジャン＝ピエール・リモザン）
- 『万華鏡』（1999、河瀬直美）
- 『M/OTHER』（1999、諏訪敦彦）
- 『SELF AND OTHERS』（2000、佐藤真）
- 『EUREKA』（2001、青山真治）
- 『路地へー中上健次の残したフィルム』（2001、青山真治）
- 『きゃからばあ』（2001、河瀬直美）
- 『H story』（2001、諏訪敦彦）
- 『たった8秒のこの世に、花を。』（2004、稲川方人）
- 『エリ・エリ・レマ・サバクタニ』（2005、青山真治）
- 『神童』（2007、萩生田宏治）
- 『サッドヴァケーション』（2007、青山真治）
- 『Young Yakuza』（2007、ジャン＝ピエール・リモザン）
- 『砂の影』（2008、甲斐田祐輔）など。

【三峡ダムについて】

長江（揚子江）は中国一の大河である。人々から「母なる川」として親しまれる一方、たびたび洪水を繰り返し、治水を目的とするダム工事が、今世紀初頭の孫文の時代より検討されてきた。1992年4月1日、第七次全国人民代表大会第五回会議でダム建設の計画が可決されて、実現に向けて動き始めた。長江で最も風光明媚な三つの峡谷がある場所に築かれることから、「三峡ダム」と命名された。貯水量 393 億立方メートル、発電能力 1768 万キロワットという世界最大のダムである。ダム湖の長さは湖北省の宜昌から重慶まで約 600 キロに及び、完成時、水深はかつての 10 メートル未満から 110 メートルになるため、沿岸地域に住む 19 の県と市の合計 140 万人が移住を余儀なくされた。

このダム建設にあたっては、生態系への影響を懸念する声や、「三国志」時代の史跡が水没することへの批判など、反対意見も強かったが、結局大型船が河口から 2400 キロ奥の重慶まで通れるようになること、世界最大の発電所が上海を初めとする沿岸部の諸都市に電力を供給できることなどの経済的メリットが優先され、このプロジェクトは承認された。

工期は三回に分かれ、段階ごとに水位は上昇。2003年に海拔 135 メートル、2006年に 156 メートル、ダム完成時期には海拔 175 メートルまであがる。水没予定地域に残されていた最後の住人たちが 2008年7月に湖北省高陽を後にし、長年にわたる国家の壮大な移住計画は終了したと報道されている。

【参考：『匿されしアジア—ビデオジャーナリストの現場から』アジアプレス・インターナショナル編・風媒社、ロイター記事、ほか】

【コミュニティシネマ賞について】

コミュニティシネマ支援センターは、多様な映画の上映を通して、地域社会に豊かな映像文化を根付かせることを目的とした上映活動を行う団体・組織（＝コミュニティシネマ）の活動を支援するため、2003年秋に設立された。現在、営利/非営利を問わず、各地の映画祭、ミニシアター、美術館、博物館、自主上映団体、公共ホールなど、180を越える団体がコミュニティシネマ支援センターの会員として登録している。

コミュニティシネマ賞は、地域で上映活動を行う人々が、「いちばん観客に見せたい映画」を選び、かつ自分たちで上映しようという、授賞と上映が結びついた、世界でも例の少ない映画賞。優れた作品ではあるが、商業的な上映が困難と思われる作品を選び、コミュニティシネマ支援センターで巡回することによって、少しでも映画状況を豊かにすることを目的としている。

『長江に生きる』は山形国際ドキュメンタリー映画祭 2007 でこの賞を授賞した。今後、全国各地で様々な形での上映展開を繰り広げる予定である。

【選評・コメント】

撮影のために、私は何度となく三峡地区を訪れている。それでもなお、フォン・イェンの『長江にいきる』には深い感動を覚えた。この映画は霧深い長江のほとりへと私を連れ戻してくれたばかりか、ビンアイという偉大な中国人女性に出会わせてくれたのだ。

何億という人々の心を動かした三峡ダム建設をめぐる出来事も、フォン・イェン監督の仕事がなければ、古新聞のネタの如く徐々に記憶から薄れていったかもしれない。百万人の生活に影響を及ぼした大変革も、『長江にいきる』がなければ、単なる官報上の一連の数字へと姿を変え、生命のこもった愛と痛みではなくなっていたかもしれない。

そういう意味で、『長江にいきる』は個人的な苦難を時代の変遷と結びつけた映画であり、権力と自由、生存の厳しさとの直面、生きる勇気を表現した映画である。ただの三峡についての映画ではない。急速な変化を背景とした、中国人の精神の歴史そのものだ。

ありがとうビンアイ、ありがとう馮艶監督。

ジャ・ジャンクー（映画監督『長江哀歌』『四川のうた』）

吹きさらしの坂上の空き地で、小役人の饒舌に短く強く反駁するときの硬い表情。それと逆に、夜の教室に息子を訪ね、小遣いを手渡ししながら語りかけるときの気遣いに満ちた顔。そして、川縁で、娘の頃のささやかな愛の思い出を吐露するときの笑顔。三峡ダム建設をめぐる映画は多々あるが、『長江にいきる』ほど深く、一人の女性の姿を掘り下げたものはない。そこから大地に根をおろした中国女性の、何ものにも屈しない心根が浮かびあがる。

上野昂志（映画評論家）

〔小川紳介賞〕 審査員講評

優しいまなざしで、カメラの対象であり友人であるビンアイを表現している映画『長江に
いきる』にわたしたちはドキュメンタリーの持つ根源的な癒しの力を感じることができた。
そして、それはまさに、本賞の意味である小川紳介監督が後輩の監督に伝えてくれる最高
の助言であると信じている。

〔コミュニティシネマ賞〕 審査員講評

厳しい状況におかれた一人の女性に長期間寄り添うことで、夫や子どもたちとの暮らしの
中に、ごく普通の人間の感情の豊かさ、ユーモアをみごとに描き出している。

〔ロバート・クーラー〕 評

<中国の国家官僚> vs <毅然とした農婦>の対決。美しい観察映画『長江にいきる』にお
いて、両者は五角の勝負だ。個人レベルで中国を見つめるドキュメンタリーが数多く発表
される中でも、この作品はより多くの観客の心を動かす力強い一本である。息苦しい政府
統括の下にある零細農家の生活の詳細な実態を、10年以上の歳月と愛情をもって描き出
している。
(『バラエティ』誌より)

〔春田実〕 評

何がいいのかというと、主人公に魅力があるのだ。役所の人間の前では語気荒く丁々発止
の交渉をするが、家族のところにもどると実にか弱くナイーブなのである。こう書くと、
彼女の魅力はうまく伝わらない。しかし作品を見ていると、厚顔と自省と羞恥の間をゆり
動く彼女の映像から、魂の叫びが聞こえてくるのである。その叫びに私は涙した。
それは共感というような次元ではなく、もっと人間存在の根源的な、ここに確かに人間が
いる、というような洗い清められた発見の感覚と、感動なのである。見ている途中からは、
主人公の乗愛が出てくるだけで泣けた。こういう映像を導きだしたのは監督の力量である。
7年という歳月をかけた取材（交流）の厚さもそれを支えている。

(メールマガジン NEONEO より)

[監督インタビューより]

Q: まず乗愛（ビンアイ）さんを映画に撮ることにしたきっかけを教えてください。

FY: 三峡ダムによる移住という大きなテーマで撮影をしている間に、私が一番興味を持ったのは、具体的な個人がそういう生活に大きな変化が起こる時に、どういう選択をするのかという点でした。そこで4人の女性に絞って、作品を作ることにしたのですが、乗愛はその中のひとりでした。国が水没する地域への投資を抑制していたため、三峡地域は中国の中でも特に貧困な地域です。多くの方は都市への移住によって、自分たちの生活が豊かになると考えていました。乗愛はその中でとても特殊な存在でした。ちゃんと自分の耕す土地に立っていて、自分の考えを持っている、都会と農村の違いについて考えている。私の知っている限りでは、こんな人はいませんでした。だからその乗愛がどういうふうに生まれて、何を今まで経験して、どうやってこの決定をしたのかということ、知りたかったのです。私は彼女から、ひとつの目覚めのようなものを感じました。意識的に自分の人生を、自分なりに考えて決めていくのは、流されたくないという思いがあるから。そういう人あまり出会ったことがなかったから、彼女に惹かれました。

Q: 乗愛さんが家族のために生きる姿が、とても印象に残ったのですが、彼女の姿を通して、ひとりの女性として生きる幸せというのは、どのようなものだと感じましたか？

FY: 女性として彼女は、自分は幸せではないと言っています。彼女にとって今は、子どもたちの幸せが幸せですね。そういう点から見ると、彼女はとても伝統的だけれど、そのような伝統的なモラルを守る一方で、自分なりに全うしようとする人生がある。一所懸命、自分の運命は自分で決めようとするところに、私は惹かれたのです。

生活というものはとても些細なことで成り立っているもので、一言では幸せかどうかは言えません。毎日の生活に追われている中で、ただ女性の幸せとは何か論じることは難しいと思います。

Q: ラストシーンが現在の乗愛さんの姿を使わず、テロップのみだったのはなぜですか？

FY: 彼女の存在が私にとっては一種の慰めのようなものでした。あの地域は、お金のために簡単に移住していく人が多くいました。でも乗愛は自分の未来を自分の手で決めて、自分の置かれている立場、将来、心、魂について自分なりに考えている。そのことが一種の農民の意識の目覚めだと私は感じたのです。最後に証拠写真のように、現在の彼女の住むテントで終わるのは、軽々しいことのように思えたのです。こういう人物がいて、どういう歴史的背景のもと、生きてきたのかというところを、もっと知ってほしかったのです。ひとつの事件の始まりと終わりを追跡した映画にしたくなかったのです。現在の様子を撮ることは簡単にできます。しかし最後に、乗愛が現在暮らすボロボロのテントを見せてしまったら、この作品はひとつの事件を追っているだけで終わってしまう。記録者気どりになりたくなかったのです。農民と幹部とのやり取りというのは日常茶飯事です。だからその幹部と農民の衝突が起こっているからどうのこうのと私は言いたいのではない。この作品では乗愛という人物を見てほしいのです。

『デイリー・ニュース 2007plus』より（採録・構成：広谷基子）

インタビュアー：広谷基子、華春、久保田桂子/2007-10-05

【作品クレジット】

中国/2008/中国語/カラー/DV カム/117 分/ 原題：「兼愛」

- 山形国際ドキュメンタリー映画祭 2007 アジア千波万波部門 小川紳介賞 (グランプリ)
 - コミュニティシネマ賞 2007
 - ナント三大陸映画祭 2008 銀の気球賞
 - プント・デ・ヴィスタ 2008 最優秀作品賞 (グランプリ)
 - REEL CHINA ドキュメンタリー映画巡回展 (北米) グランプリ
 - 香港国際映画祭 2008 ドキュメンタリー優秀賞
 - バンクーバー映画祭 2007
 - ヴィジョン・デュ・レール 2008
 - シェフィールド・ドックフェスト 2008
 - あいち国際女性映画祭 2008 正式招待
- ほか

製作・監督：フォン・イエン (馮艷)

共同製作：チャン・ヤーシュエン (張亜璇)

撮影：フォン・イエン、フォン・ウエンヅ (馮文澤)

編集：フォン・イエン、マチュー・ヘスラー

音響設計：菊池信之

音響助手：高田伸也、早川一馬、熊谷悠

方言：ワン・インフェン (王銀芬)、ビエ・ファーウエン (別發文)

技術サポート：ルー・ビン (呂賓)

字幕協力：箭子喜美江

予告編：秦岳志

予告編音楽：KANJI KAI / 二胡演奏 JUN WANG

公式ホームページ：中山大樹

宣伝：原田徹

協力：シネマトリックス

特別協力：浅田義信、片岡和子、岐部明弘、肖菊芳、宋立水、西海裕子
牧野宏子、王慧權

配給：ドキュメンタリー・ドリームセンター

(C) ドキュメンタリー・ドリームセンター